



教育事情



スリランカ

BOP層実態調査レポート

■スリランカ民主社会主義共和国 — 基礎データ —

- 面積: 65,610平方キロメートル[日本の約0.17倍]
- 人口: 約2,048万人 (2013年: スリランカ中央銀行 Annual Report 2013)
- 首都: スリ・ジャヤワルデナプラ・コッテ / 人口: 10万7,508人 (2012年センサス)
- 名目GDP総額: 672億ドル (2013年)
- 1人あたりのGDP(名目): 3,162ドル (2013年)
- 実質GDP成長率: 7.3% (2013年)
- 為替レート: 1ドル ≒ 約129.06 スリランカ ルピー (2013年 平均値)

出所: JETROホームページ 国・地域別情報(J-FILE)「スリランカ概況(2014年11月更新)」



スリランカにおける教育制度

スリランカの教育制度は、小学校(5年)、前期中等(4年)、後期中等(2年)、高校(2年)、大学、から成り(下図参照)、5歳の1月に入学する。

小学校5年で奨学金試験を受け、一定の得点以上を取得した児童は、6年生から進学校に転校できる機会が与えられ、低所得家庭の児童には奨学金が支給される。中等後期修了時(11年生の12月)に、高校入学資格試験に相当する一般教育資格オーレベル試験(G.C.E.O/L試験)があり、合格すると高校進学資格が与えられる。約2年半後の13年生の8月に、大学入試資格試験に相当する一般教育資格エーレベル試験(G.C.E. A/L試験)があり、合格すると大学入学資格が与えられる。





学校の種類と学費

公立学校

スリランカの公立学校は、13年生の文系・理系のクラスまである「1AB校」、13年生の文系のクラスまである「1C校」、11年生まである「タイプ2校」、8年生まである「タイプ3校」の4種類がある。1AB校と1C校は国立が多く、その他は州立である。公立学校の総数は9,662*。 *：School Census 2008(スリランカ教育省)

基本的には家の近くの学校に入学するが、保護者は、高校まで続けて進学できる1AB校や1C校に子供を入学・転校させようとする傾向にあり、そのための努力を惜しまない。

公立学校の学費は無料。教科書は無償貸与、制服は1着分の生地が毎年支給される。無償教育とはいえ全てにおいて無料ということではなく、学用品や靴・鞆は保護者の負担であり、新学年になるとこれを揃えるのに工面する親も多い。体育祭や学芸会、スポーツやダンスなどの課外活動のユニフォームやコスチューム、靴やスポーツ用品なども、保護者の負担である。



地方都市の小学校



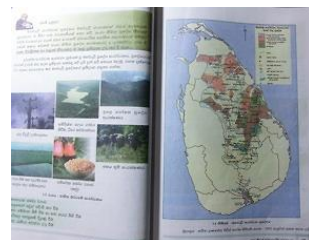
村の小学校



理科実験



グループ学習



9年生の教科書
(上：地理)(下：科学)

●公立学校の例：ロイヤル・カレッジ

ロイヤル・カレッジはコロンボにある国立の1AB校である。英国パブリックスクールの伝統を受け継ぎ、1835年に設立された男子校。5年生の奨学金試験にトップクラスで合格した全国の優秀な学生が編入してくる。卒業生には財界・政界の有力者も多い。

公立なので学費は無料。施設費として年6,000ルピーを各生徒から徴収しており、体育祭や音楽会などの行事には保護者やOBから寄付を募っている。



ロイヤル・カレッジ

学校の種類と学費 一つづき

私立学校

スリランカの学校教育は、植民地時代に建てられたミッションスクールにより普及した。その後、多くの学校は国有化されたが、現在でも私立学校として運営されているものが全国に94校*ある。

私立の男子校では、セント・トーマス・カレッジ(コロンボ)、トリニティ・カレッジ(キャンディ)、女子校では、レディース・カレッジ、ビショップス・カレッジ(いずれもコロンボ)、ヒルウッド・カレッジ(キャンディ)等が有名。

私立学校は、スリランカの教育カリキュラムやシラバスを採用しており、教科書は公立高校と同様のものが無償で貸与されている。教員の給与やその他の学校運営経費は、保護者の支払う学費で賄われているところが多い。私立学校は一般的に、施設や学習環境が整っており、教育の質も安定しているとの評判である。

*: 特殊学校を含む。School Census 2008(スリランカ教育省)

● 私立学校の例: ミューシアス・カレッジ

ミューシアス・カレッジはコロンボにある私立の仏教系の女子校である。英国統治時代の1891年に、仏教に感銘を受けた英国人教育者マーリ・ミューシアス女史により設立された。

幼稚園から13年生まであり、生徒数は約6,700名、教員数は約300名。年間の学費は約4万5千ルピー。



ミューシアス・カレッジ

国際校

主にイギリスのシラバスを採用し、英語で授業を行う国際校は従来、コロンボに滞在する外国人家族の子供を対象とした学校であった。しかし近年、英語で教育を受けさせたい、将来海外へ留学させたい、などの希望をもつスリランカの一般家庭において、子供を国際校に通わせる傾向が増している。国立校への入学が難しいこと、私立学校の数が限られていることなども、国際校を選択する一つの背景となっている。国際校は、人気の高まりとともに、コロンボ郊外や地方にも設立されるようになった。国際校には、外国投資によるもののほか、スリランカ資本のものもある。

国際校の学費は幅広い。年間約4~5万ルピーで私立学校とあまり変わらない学校もあれば、年間10~15万ルピーとやや高額な学校もある。一方、外交官や国際機関職員の子供が通う、年間の学費が100万ルピー近くの学校も存在する。

コロンボ近郊の国際校の例としては、コロンボ・インターナショナル・スクール、アジア・インターナショナル・スクール、ブリテッシュ・インターナショナル・スクール、ライシウム・インターナショナル・スクール、ゲートウェイ・カレッジ、オーバーシーズ・スクール・オブ・コロンボなどがある。

● 国際校の例: コロンボ・インターナショナル・スクール

コロンボ・インターナショナル・スクールは1982年に設立された。キャンディに分校を持つ。生徒数は約2,000名。英国のカリキュラムを採用しており、統一試験はロンドンO/LやA/Lを受験する。

年間の学費と教材費は、小学生が約40万ルピー、中学生で約55万ルピー、高校生や大学受験コース約60~70万ルピーである。



コロンボ・インターナショナル・スクール



就学・進学率

高い就学率と高学歴指向

スリランカの初等教育への就学率は97.5%*であり、義務教育年齢である5～14才の就学率も93% *である。同国では高学歴を目指す傾向にあり、毎年初等教育への約35万人の入学者のうち約31万人が、日本の中学卒業時にあたる11年生でO/L試験受験を受験する。しかし、同試験に合格するのは受験者のうち約半数となっている。O/L試験は全部で9科目があるが、試験に合格するためには数学、英語、理科の3科目で40点以上をとる必要がある。O/L試験の合格率の低さや、その後の職業訓練の機会が限定的であることから、毎年大量の若者が技術を持たないまま社会に出ることが、若年層の失業率の高さの一因となっている。

*就学率の出所：UNICEF(2006年)

少ない大学入学の機会

A/L試験を受験者12万人のうち7万人が大学入試資格を得るが、実際に大学に入学できるのはわずか2万人となっている。設備や予算の関係で、大学の定員入学者枠が限られていることが原因とされている。また、A/L試験実施後、選択制で87科目にのぼる試験の採点と、偏差値による大学入学者の選定に時間がかかることから、大学に入学するまで約1年半を要する。近年は改善傾向にあるが、大学構内での学生運動の激化により大学が閉鎖され、授業が中断されることもある。このようなことから、大学に入っても卒業時には20代半ばを過ぎてしまうため、就職活動の際に不利になる、あるいは婚期を逃してしまう、といった側面もある。政府は、大学の定員の拡大、短大の設立や技術教育の普及によりこの課題を克服*しようとしている。

*出所：スリランカ統計局、教育省、大学助成委員会ウェブサイト

大学教育

最も長い歴史を持つのは、イギリス統治時代に設立されたセイロン大学を前身にもつ、コロンボ大学とペラデニア大学、およびセイロン技術短大を前身にもつモラトゥワ工科大学である。

1980年代以降、進学熱の高まりに応え、高等教育を受けた人材需要を満たすため、政府は全国各州に大学を設立していった。

2015年現在、合計15の国立大学がある。国立大学は高等教育省傘下の大学助成委員会が運営管理を統括している。

大学助成委員会は18の国立高等教育機関も管轄している。これらは農業や情報工学、アーユルベーダ、伝統医学などに特化した学位レベルの教育機関および大学院大学である。これらの国立大学および高等教育機関の学費は無料であり、貧困家庭の学生には、マパボラと呼ばれる奨学金が支給されている。



コロンボ大学カレッジハウス

【スリランカの大学・トップ3*1】

- コロンボ大学(2,135位)
- ペラデニヤ大学(2,466位)
- モラトゥワ大学(2,608位)

モラトゥワ大学は、グーグルの主催する学生ITコンテスト「サマー・オブ・コード」において、参加承認を受けた学生数ランキングで過去7年間連続世界1位*2の座を獲得している。

*1：“Webometrics”による世界の大学ランキング(2014年 <http://webometrics.info/en/Asia/Sri%20Lanka%20>)

*2：<http://google-opensource.blogspot.com/2013/07/google-summer-of-code-full-of-stats.html>



大学教育 —つづき—

その他、NIBM(National Institute of Business Management)や NSBM(National School of Business Management)などといった経営管理を学ぶ大学や、UNIVOTEC(University of Vocational Technology)という職業訓練技術を学ぶ大学がある。これらの大学は高等教育省の傘下にあるが、学生から小額の授業料を徴収しており、財務的に一定の独立性を保っている。

Aレベルに合格して大学入学資格を得ても、定員の関係でスリランカの国立大学に入学できない学生が、年間約5万人いる。このような学生を対象に、海外の学位を提供する教育機関が、約10年前から設立され、近年その数が増加している。このような教育機関は、国内外の私企業が、スリランカ投資委員会(BOI)の投資認定を受け設立することが多い。年間の学費が50万~100万ルピーと高額なので、入学は富裕層の子弟に限られる。スリランカで学び、提携大学の学位を取得するコースと、スリランカで1~2年基礎コースを履修し、提携大学に編入するコースがある。主なものには、オーストラリアやマレーシアのモナーク大学などと提携しているANC Education、英国ロンドン大学やオーストラリアのディーキン大学と提携しているRoyal Institute of Colombo、英国スタフォードシャー大学などと提携しているAPIIT などがある。

英国公認会計士の資格を取得するコースも若者に人気がある。Aレベル試験の後、国立大学に入学できるかどうか分かるまでの約1年のブランクを利用して、これらのコースを始める学生もあり、大学在学中に専門性を増やすためにコースに通う学生もいる。代表的なのは、CIMA(Chartered Institute of Management Accountants)やAAT(Association of Accounting Technicians of Sri Lanka)などのコースである。スリランカでは毎年約5,000名が、英国会計士の資格試験に合格しており、同国は、英国に次いで、公認会計士の人材のプールを豊富に持つ国となっている。

大学や専門学校等でICTを学ぶ学生も増えている。スリランカのITプログラマーの件数はインドより約3割安いと言われており、上述のとおり、会計関連人材の蓄積もあるため、近年では海外の企業が、会計・財務、プログラミング業務などをスリランカにアウトソーシングする例が目立っている。



NIBMコロンボ校

学習塾・進学塾

スリランカでは学習塾・進学塾が盛んである。放課後や土曜日、お寺や公民館で行われる学習塾は、現職や退職した学校教員が教えていることが多い。月謝は1ヵ月300~500ルピー程度である。BOP層の家庭でも、学校での学習では不十分、親が教えきれない、等の理由で、このような学習塾に子供を通わせている例は多い。都市部では、100~3,000人の学生をひとクラスに集める大手の進学塾がある。有名なのは、コロンボ5にあるシグマ・インスティテュート、コロンボ4と7にあるシャクティ・インスティテュートなどである。コロンボ市に隣接するヌゲーゴダ市には、シプナ・インスティテュート、ロタリー・インスティテュート、ルーワー・インスティテュートなど、人気の高い進学塾が多くあるため、夕方や土日になると塾通いの高校生で通りがあふれる。中学生向けのクラスは1回1~2時間で、月謝は800~1,200ルピー、高校生向けのクラスは1回3~4時間で月謝は1,500~2,000ルピーである。模擬試験のコースや休暇中の集中コースもある。



コロンボ市内の進学塾



学習塾・進学塾 —つづき—

これらの進学塾のうち、いわゆる名物先生のいるクラスや、Aレベル試験で高得点を獲得した学生が常に多数いる、評判の高いクラスは、数百人の生徒に向かって、マイクをつかって教師が授業を行う。日本の大手予備校のような環境である。教えているのはベテラン学校教員や塾の専任教師である。



成績優秀者を出した塾の宣伝

BOP層の教育事情

● コロンボ県郊外在住：大学2年生(女性)

ジャヤワルダナプラ大学の2年生。A/L試験の初年度は、大学入学に足る点数がとれなかったが、1年間勉強し直し再挑戦の後、合格した。父は家具のクッション工で50歳。母は主婦の傍ら、クッションを縫う作業をして家業を手伝っている。小さい時から父の仕事を手伝っており、父に負けないクッション工技術を身につけている。大学生になった今も、学業の傍ら家業を手伝っている。住んでいる所は家具製作が盛んな地域であるが、女性で家具製作に携わっている人は大変少なく、貴重な存在である。

大学は国立で入学金や学費は無料。実家から通っているの下宿代なども不要。学生生活で出費となるのは、通学のバス代、本代、学用品などのみである。しかし、高校生と中学生の妹たちが合計3人おり、教育費や食費もかさむので、家計を助ける必要がある。そのため、家業の手伝いに加え、コロンボの私立病院で見習い看護師として週に2～3日アルバイトをしている。大学では彼女のようにアルバイトをしている学生もかなりいるという。学業、家業、アルバイトに加え、妹たちの勉強の面倒も見ており、毎日大変忙しい。将来は何か専門職につきたいと考えている。



クッション作り(ウレタン材の加工)



椅子の座面のクッション作り



BOP層の教育事情 一つづき

● カルタラ県ベールワラ市在住：30歳と29歳の姉妹の子供たち

・姉(30歳)：結婚前は国際校で事務の仕事をしていましたが、今は専業主婦。夫(32歳)は宝石の売買をしている。

【姉の子供たち】

①長女(12歳)：7年生

3年間国際校に通っていたが、父親の商売が停滞したことから、費用のあまりかからない公立校に転校した。1学級につき40人あまりの生徒がいるため副担任が必要だが、副担任を雇う公的予算がないので、保護者が毎月1人200ルピーを寄付している。

②長男(8歳)：4年生

公立の男子校に通っている。

・妹(29歳)：結婚前は国際校で英語の先生をしていたが、今は専業主婦。夫はケーティング会社に勤務している。

【妹の子供たち】

③長女(6歳)：2年生

公立の女子校に通っている。

④長男(3歳)：

私立の幼稚園に通っている

⑤次男(2ヵ月)：



(左から)姉の長男、妹の長女、姉の長女、妹の長男

姉妹と家族は、スリランカの人口の約8%を占めるスリランカ・ムーア(ムスリム)民族である。スリランカのムスリムはタミル語を母語とするが、姉妹はシンハラ語で学校教育を受けており、多数民族の母語であるシンハラ語を流暢に話す。家の近くにシンハラ語で教育をする良い学校があり、そこに通っていたとのことである。小さい頃から、家庭ではタミル語を話し、学校ではシンハラ語で勉強するという環境にいたので、どちらも堪能になった。

姉妹の子供たちは、母語であるタミル語で教育を受ける公立高校に通っている。ベールワラ市は、ムスリムの人口が多いので、このような学校が多くある。子供たちがタミル語とイスラムの教えをしっかりと学べるのは好ましいが、シンハラ語が上達しないのが、親としては少し心配であるという。シンハラ語が話せると、将来、就職や商売で有利になるとの考えからである。